

アメリカ国民が武装するのはなぜか。

～以下、「武装した市民が支える民主主義」という理念の国（ノンフィクション作家 石川好）＜毎日新聞（9.3.6.1）より＞～

注：・・・・・・は省略部分。太字は引用者が強調のためにそうしました。

・・・・・・ケネディ兄弟も、マルコムXもマーティン・ルター・キングも、そしてジョン・レノンも凶弾に倒れた。こうした事件が発生するたびに、アメリカ社会では、ガンコントロールの法案が提出されたり世論が高まってきたのだが、・・・・・・状況はさらに悪化している。・・・・・・大統領の暗殺を含め殺人が日常茶飯事となったアメリカであるにもかかわらず、人々はこの社会から武器を手放そうとはしない。ベトナム戦争を終結させ、大統領を退陣に追い込み、公民権法を成立させ得る国民世論でありながら、なぜか銃に関してはそうならない。人権を、あれほど強く主張する国民でありながら、**年間万にも達する人間が銃で殺されていく**現実対して、アメリカ社会は、無力である。というより、なぜ、アメリカにおいて言論の対極である「銃」には、寛容なのだろうか・・・・・・。

なぜアメリカ人は武器にこだわるのだろうか。未知の大陸を武器を持って先住民を追い払い開拓し、そして宗主国であるイギリスに武器を持って独立戦争を勝ち得た。このアメリカ史の始まりに、全てが起因しているはずである。

その始まりのために世界初の成文法憲法となるアメリカ憲法においてさえ（といっても一年に修正された権利の章典の第二章にだが）人民の武器所持が認められているのである。**信仰や言論や財産の自由等に並ぶ権利として、人民の武器所有をも「権利」として認める**ことに注目しなければならない・・・・・・。

それにしても、高校生でさえ、武装しなければ学校にも通えなくなった現実があるにもかかわらず、世論の国アメリカでは、たとえ憲法で認められたものであってもどうして市民社会から武器廃絶ができないのだろうか。

一般的には、アメリカの軍事産業やライフル協会の政治力があまりに強大なので、法案が提出されても、流れるか、または、こうした業界が常にメディアを通して自己防衛の正当性や武器で友人や家族や国家や正義を守るヒーローたちを登場させ、洗脳しているからだ、と考えられている。そうした考え方は半分くらいは正しいと思うが、**人々が銃を手放さないのは、大きくって二つの理由がある。**

一つは、**武装された市民社会のみが、武装した国家権力に対し唯一対抗できるという考え方**。たとえばアメリカは、国家としては世界最大の軍事大国であるが、この**軍事大国に対する唯一の抑止力は武装した市民社会**だという信念である。アメリカほど軍人が威張らない国はない。それはシビリアンコントロールが行き届いているからなのだが、**国家の軍事力と市民の軍事力が拮抗**しているからなのである。世界最高の軍事力を持つ軍隊といえども、アメリカ社会では絶対にクーデターは起こし得ない。なぜなら、二億四千万人の人口のうち、二億丁もの銃が市民社会に存在しているからである。

もう一つは、**平等性の問題がある。いかなる人種的な差異も、富者も貧者も、銃の前では平等である**。ある民族には与えられない職業も、銃は手続きを踏めば、いかなる人間も持つことができる。**銃は平等の最後の砦**となっているのである。

アメリカほど市民の言論が力を持つ国は他にない。しかし、それは市民が武装しているからなのである。なぜなら、市民社会が武器を捨てたとき、市民社会の言論は、不正を犯した大統領を辞職に追い込んだり、国家に戦争をとめさせることは決して出来ないだろうと、アメリカ人は、いや「真の民主主義者」は理解しているからなのである。それゆえに、アメリカの言論ですらガンコントロールはできても市民社会の武装解除だけは、できないのである。